

2019年  
12月5日  
木曜日

増永 俊一 教授 (アメリカ文化・アメリカ文学)

# 「朝食」(1933)——強欲の対極に在るもの

ジョン・スタインベックは、1962年にノーベル文学賞を受賞したアメリカの小説家である。「朝食」は3ページに満たない掌編だ。

「私は、どこか山中の谷間にいて、早朝で、凍えるほどに空気は冷たい。田舎道を歩いているとテントが見え、若い女が朝食の準備をしている。ほどなくテントから二人の男が出てくる。おもむろに年配の男が「私」に問いかける。「もう朝食は食ったか」と。献立は、ベーコンとオープンで焼いたパンと熱いコーヒーがそのすべて。

夜明けと共に次第に辺りの彩りが変わってゆく。調理用のストーブの隙間に見えるオレンジ色の炎も鮮やかだ。二人の男は真新しい上下のデニムを着ている。

ジュウジュウと音を立てて焼き上がるベーコンの匂い、パンが焼ける香ばしい匂いも漂い、涌かしているコーヒーの香りが鼻腔をくすぐる。

コーヒーはととても熱く、喉を焦がす。読者の嗅覚を刺激し、喉を通るコーヒーの熱さは、触覚によって感知される。

彼らは寡黙で、咀嚼する音以外聞こえない。この掌編の魅力は、五感すべてに訴える鮮烈な描写力にある。質素だが温かい食事を口にして、年配の男は「ああ、うまい」と呻く。さて、「私」が出会った彼らは、赤の他人を朝食に誘うほど裕福なのだろうか。そうではあるまい。

「俺たちはこれまでに12日もその仕事をしてるんだ」と若い男が言った。

娘がストーブの方から私に話しかけた。「この人たち、それで新しい服も手に入れたのよ」

二人の男は新しいデニム地の服を目を落とすと、二人して少し微笑んだ。

「その仕事」とは、そのあとに明らかになるように「綿摘み」の仕事だ。彼らは自分の土地を持たない日雇い労働者なのだ。「12日」も仕事にありつけ、温かい食事を取ることが出来、新しい服が買えるようになったことを彼らは素直に喜ぶ。その喜びを共有しようとするかのように、たまたま通りがかった「私」に声をかける。この慎ましい充足感に、「私」と共に読者も共感する。

何とこのベーコンとパンとコーヒーだけの朝食は美味しいそうなのかと。そして、決して裕福ではない季節労働者の心が、その温かい食事以上に温かいのかと。多くの人は、それを幸福な光景だと感じる。朝食を食べ終えて、「私」と彼らは静かにその場を去り、別れていく。

しかし、この美しく静かなエンディングには、実は痛ましい続きがある。翌年に出版された代表作「怒りの葡萄」の主人公たちもまた、季

節労働者だ。しかし、「怒りの葡萄」で描かれている移動農民には「朝食」の季節労働者が味わった、あのささやかな充足感すら許されていない。1930年代の世界大恐慌を背景に、移動農民として追い詰められていく小規模農民の絶望。本作には、苛烈な資本主義によって追いやられてしまう農民に寄せる作者の共感と、暴力的な搾取に対する「怒り」が込められている。

資本主義の本義は飽くなき「利潤の追求」だ。与えるよりも、むしろ奪う。スタインベックは「季節労働者」に心を寄せたが、現在の文脈に置き換えるならば、「非正規労働者」と言った方が分かりやすい。「非正規雇用」の拡大の中で、この「朝食」で描かれるようなささやかな充足感と人間の温かさに、人々はますます憧憬の念を強めているのかも知れない。